

04 洗濯

蛍光剤を含む洗剤を使わない方がいい衣類とは？ 落ちにくい黄ばみはどうすればいい？

夏は汗をかくことも多く、洗濯物も多くなる季節です。

体から出る汚れには汗、皮脂、および皮膚の角質などに由来するたんぱく質などがあります。皮脂の主成分はトリグリセリドと呼ばれる脂で、皮膚を保護するため皮脂腺から常時分泌されています。皮脂は無色なので、見た目では汚れとして識別しにくいのですが、衣類を着用すると必ず付着してきます。これを放置すると黄ばみやにおいの原因となります。

汗に含まれる汚れは水溶性で、水でも比較的落としやすいものですが、水に溶けにくい疎水性の皮脂汚れは水だけでは簡単に除去できないので、洗剤を利用します。

洗剤には界面活性剤が含まれており、そのままでは混ざりにくい水と油（汚れ）を混ざりやすくすることにより、汚れを落としやすくします。

多くの洗剤に含まれ、衣類を白くするはたらきをするものに蛍光剤があります。蛍光剤は、光の中に含まれる紫外線を吸収して青い光を放ちます。青い光は黄色い色と混ざると白く見えます。このため、わずかに黄ばんだ衣類でも蛍光剤を使うとより白く見せることができるようになります。綿や麻などの天然繊維の多くは、繊維そのものがやや黄色味をおびているため、これらの素材の衣類は蛍光剤処理をされ、より白く見えるように加工されています。

洗剤の中に含まれている蛍光剤は、もともと衣類に含まれている蛍光剤が洗濯によって失われるのを補うとともに、わずかに残った黄ばみをおさえ、衣類をより白く見せるはたらきをしているのです。しかし、**蛍光剤のこうした作用のため、淡色系の色柄物や、素材本来の色をい**

かした衣類を繰り返し洗濯すると、見た目が白っぽくなり、本来の色とは次第に異なってしまつ場合があります。こうした衣類の洗濯には蛍光剤を含まない洗剤を使うとよいでしょう。

衣類の黄ばみは洗剤だけではなかなか落ちません。黄ばみを落とすには漂白剤が便利です。

漂白剤には次亜塩素酸塩を主成分とする塩素系のものと、過酸化水素を主成分とする酸素系の2種類があります。塩素系は白物専用ですが、酸素系は色柄物にも使用することができます。また、酸素系漂白剤には液体タイプのもので粉末タイプのものであります。液体タイプのは、汚れに直接塗ることができ便利です。

落ちにくい黄ばみは漂白剤を直接塗ってから、洗濯するか、それでも落ちない場合には、洗剤と漂白剤を入れた水に1時間ほど漬け置きをすると効果的です。このとき洗剤を溶かす濃度や水の温度を少し高くすると、より高い効果が得られます。ただし、**酸性タイプの洗剤と塩素系の漂白剤を混ぜると、有毒な塩素ガスが発生し非常に危険です。**洗剤と漂白剤を混ぜる場合の注意、洗剤や漂白剤の濃度、溶かす水の温度はそれぞれの製品の説明書をよく読んでから使用してください。
(平成19年7月)

